

見えない城壁 ——集団化時期中国農民の文化心理をめぐって——

田原 史 起

1. はじめに

本稿は、中国農民の主観的体験を読み解く歴史社会学の試みである。とりわけ、1960～70年代を中心とする「集団化時期」の、農民の「都市性」や「都市性」に対する意識が中心的な主題となる。前稿(田原2022)では当時の中国に存在した都市=農村間の「交叉地帯」¹とその意味について論じた。しかし、交叉地帯が存在することにより生まれた集合的な心理体験=文化心理の解明は丸ごと課題として残されていた。

集団化時期中国農民の「主観的な体験」を問題にする²ことには、一体どのような意義があるだろうか？ おそらく、それは、大国となった21世紀現在の中国を基底部分から支える農民らの意識・行動をよりよい仕方で理解することに資する。より具体的には、別稿(田原2019b; Tahara 2022)で概念化した21世紀の中国農民の行動原理、すなわち「他律的合理性」(heteronomous rationality)が生み出される土壌の形成過程であるといつてよい。中国農民の他律的合理性は、二つのポイントに集約できる；①都市部の市民と自分達を引き比べないこと、したがってその心理的効果として、都市は「憧憬」の対象であっても「嫉妬」の対象としては感じられないこと。いっぽうで、②同村民や近隣村落など、身近な他人との間での引き比べはより強く意識され、行動選択の基準となる。とりわけ、自分が身近な他人と比べて公平、公正に扱われていないと感じた際の不満は大きく、大小さまざまな抗議行動がとられる。こうした行動原理は、筆者自身が2000年代の中国農村でのフィールド・ワークを通じて見出したものである。前稿(Tahara 2022)では、行動原理の起点には集団化時期の歴史的な経験があることを主張した。しかし実

¹ 本稿でも取り上げる中国の作家、路遥の小説の底流を流れるモチーフとして、安本(1997)が注目したキー・ワードであり、筆者はこれを社会科学の分析概念として定式化を試みた。簡便に定義すれば、集団化時期の都市=農村の二元構造の前提のもとで、そのシステムの維持のために必要とされた、完全に都市でも、また完全に農村でもない中間地帯、である。以下、本文ではカッコなしでこの語を用いる。

² 本稿の問題意識に関連する先人の試みとしては、久保(1978)や上田(1991)がある。とりわけ後者は、本文でも取り上げる路遥の『人生』を題材として、農村住民が主観的に体験した都市性や農村性を、相対的かつ重層的な「洋」と「土」の関係から捉えており、本稿の分析を展開するうえでも、そこからスタートせざるを得ない重要なエッセイである。

のところ、その形成過程そのものの検討にまでは手が回っていなかった。本稿で取り組みたいのが、まさにこの、農民らの過去の主観的体験の具体的検討である。

それでは一体どのような方法で、農民の主観的体験などというものを、納得のいくかたちで追体験できるのだろうか？ 人々の意識、とりわけ自らの声を直接に外部に伝え、記録に残す習慣のない農民らの意識を探るのは、資料的な制約からも、ある種、至難の業に思える。そこで、完全にはいかないまでも、この制約を克服するための一つの次善の策を思いつく。それが農村を扱った文学作品、とりわけ自ら「農民」としての生活体験をもつ作家らによる小説や自伝的作品を利用することである。現代中国の作家、路遥（1949-1992）³、賈平凹（1952-）⁴、閻連科（1958-）⁵らの作品では、作家本人の主観的体験や作家によって代弁された登場人物らの意識が随所で陳述されている。これらが、農民らの文化心理を理解するうえで、格好の手掛かりを提供してくれるだろう。

例えば閻連科は、叔父の住む都会に憧れた農村少年時代を回顧して、端的に次のように書いている。

私は叔父の乗る汽車とバスにあこがれた。叔父の制服、粗布ではなく機械織の綿布で作った上着とズボンが羨ましかった。さらに言えば、叔父のはいている革靴とナイロンの靴下、夏に帰ってきたときにかぶっていた日よけ帽、冬に帰ってきたときにはめていた白い手袋もある（閻連科 2009: 136=2016: 173-174）。

農民の都市に対するイメージが、当時の具体的な事物に載せられ、単純な憧れとして述べられている。そして、それらの都市性を帯びたイメージは、叔父という身近な人物が農村と都市の間を環流したことでもたらされている。

³ 略歴は以下の通り；1949年12月3日、陝西省清澗県王家堡村に生まれる。7歳の時、隣県の延川県郭家溝村の伯父家で養子となる。延川中学卒業後、文化大革命の最中、1969年に帰郷青年として郭家溝村に戻り農業に従事。1973年に延安大学中文系に入学するまで、農民として生活。卒業後は『陝西文芸』の編集者となる。1982年、『人生』で第二回全国優秀中編小説賞を受賞し、同年に中国作家協会の会員に。1991年に長編小説『平凡な世界』で第三回茅盾文学賞を受賞するも、翌年に死去。

⁴ 略歴は以下の通り；1952年2月21日、陝西省商洛市丹鳳県棣花鎮に生まれる。1967年、14歳で初級中学を卒業するが、文革の煽りを受け、実家の農村に戻ることになる。それから工農兵大学生の推薦により大学に入学する1972年頃までの5年ほどを棣花公社、棣花大隊、東街村の社員すなわち農民として過ごし、1974年に作品を発表し始める。1975年、西北大学中文系を卒業。卒業後は陝西人民出版社の編集者となる。代表作に、『秦腔』（茅盾文学賞受賞）、『古炉』『廢都』など。

⁵ 略歴は以下の通り；1958年8月24日、河南省嵩県田湖鎮に生まれる。高級中学を中退したのち、1975-77年、叔父が臨時工として働いていた河南省新郷市のセメント工場で自分も臨時工として労働、1977年、大学を受験するも、不合格となる。1978年、中国人民解放軍に入隊、第二砲兵隊創作室の職業作家になる、2008年、中国人民大学の教授となる。2009年に随筆集『父を思う』（《我与父辈》）を発表。代表作に、『炸裂志』、『人民に服務する』（《为人民服务》）、『丁莊夢』など。

汽車について、村の外の世界について、私が最初に知ったことはみな、叔父から聞いた情報だった……都会の道路は、すべて舗装されている。都会の夜は、人通りのあるなしにかかわらず、ずっと街灯がともっている……15ワットの電球がともると、石油ランプを一部屋に100個つけたように明るい(閻連科2009: 137=2016: 174-175)。

都市市民の農民に対する優越感・蔑視など、研究のテーマとしては取り上げられにくいテーマも、小説という手段を通じて初めて生々しく描かれうる。路遥の『人生』には、1980年前後の高級中学卒業生の体験がリアルなかたちで描かれている。主人公の高加林は卒業後、実家の農村に戻り、いったんは人民公社の教員となるも、コネのある他人にポストを奪われ、ヒラの農民となる。以下は、公社員の臨時の仕事として、加林が県城のある単位に肥汲みに派遣された際のエピソードである。彼は、一人の県城市民の女性にあからさまに罵倒される。

彼が、三桶目を移し終え、再び空の桶を手に中庭を行こうとしたとき、その婦人が今度は立ち上がって彼に向かって叫んだ。「肥汲み！ あんたは人の鼻をへし曲げる気かい。どっか他のところでやってくれ。ここで人様をバカにするんじゃないよ！」高加林は一瞬中庭に棒立ちになった。両手は怒りに震え、歯は唇をかみ締める。明らかに彼女の方が人を見くびっておきながら、逆に彼が相手をバカにしていると言う……「田舎者めが、まったく始末に負えやしない！」その女はまた口汚く罵った。高加林も今度は我慢できなくなってしまった。鼻の奥がツーンとなり、心に思う。農民はこれほどまでに侮辱されるのか(路遥2006: 91=2009: 310-311)。

もしも「純粋な」農民であれば、市民からのこうした罵倒に遭っても、軽く受け流すことができるのかもしれない。加林の場合、数年前までは県城の学生だったプライドもある。現在、「農民」として市民に馬鹿にされることの屈辱が、彼の「鼻の奥をツーンと」(鼻根一酸)させたのである。しかも、加林を罵倒した女性は、実はかつての同級生、克南の母親だった、というオチまで付いている。彼女は、肥汲みをするみすぼらしい農民にしか見えない若者が息子の級友だった加林だなどとは、ゆめゆめ思わなかったのである。

2. 教育——市民との邂逅

高級中学(日本の高等学校に相当)は、現在に至るまで県城の最高学府である。県より一級上の地区級市の中心地には医療や教育関係の高等専門学校をはじめとする若干の高等教育機関があるが、一般的な県域社会には、大学レベルの教育機関は存在しない。

したがって高級中学の教室は、県城市民と県域各地からやってきた農民が一堂に会することのできる最初の空間であり、県域社会の内部で都市と農村が直接的に接触する数少ない場のひとつであった。

1958年からの大躍進が失敗に帰し、農村に飢餓が蔓延した直後、1960年代初期の高級中学の生活を描いたのが路遥『困難な日々』(1961年記実) (路遥 2009) である(以下、『困難』と略記)。1961年に県下第二の成績で県の唯一の高校に入学した主人公「私」の目線から学校生活が描かれる。学校のある県城は彼の実家の農村から50キロ以上、離れていた。

所属することになった「エリート・クラス」の級友は、農民の子である「私」以外、いずれも公務員で、多くは県レベルの指導幹部の子女であった。これが当時の実際の状況を反映しているとすれば、高級中学の創成期である1960年代初頭に農村から高級中学に進学するのは、かなり困難であり、農村出身者は少数派でもあったと思われる。そもそもやっと飢餓を乗り越えたばかりのこの時期、農民家族には子弟を上級の学校に送る余裕はほとんどなかったであろう。

県内の都市民と農民の子弟が同じ教室で机を並べた際、なんといっても目に見えやすいのは衣食など生活水準の差であった。路遥『困難』の「私」の場合、勉学の傍ら、日々、即物的な、文字通りの「飢え」に苦しんでいた。常に空腹であり、学校周辺の野山で狂ったように食べものを探し求めた。山棗、野草、草の根、噛んで苦くない者は何でも腹に入れた。とくに雀の卵が御馳走であった(路遥 2009: 59)。飢えに加え、冬季には衣類が足りないため寒さにも耐えねばならなかった。

もう一人の作家、賈平凹の初級中学時代の1970年前後の記憶も参考にしてみよう。賈の出身地、陝西省南部、丹鳳県の県域はほぼ全体が山地であり、平地があるのは丹江の兩岸のみである。なかでも栄えているのは県城(「城里」と呼んだ)、棗花(「街」、商鎮(「鎮」)の三ヶ所であった。賈の中学校は隣町の商鎮にあり、実家のある棗花から7.5キロほど離れていた。賈は農村の実家に戻る直前、初級中学の卒業式の場面を憶えている。卒業の際にカメラで記念撮影をしていたのは商鎮に家のある学生たちで、そこには幹部の子弟も混じっており、彼らは着ている物も良質で、髪を梳かして分けており、自転車に乗って、ズボンのベルトに卓球のラケットを差していたという。いっぽう賈のように棗花からきた子供たちはたいていが農民の子弟か、より格下の幹部の子弟だった(賈平凹 2006: 21-22)。同じ学校の生徒の裕福さが、衣服やカメラ、ラケット、自転車のイメージと共に脳裏に刻まれている。

このように、当時の高級中学生の間での農村出身者と県城出身者の大きな違いは、生活水準、なかでも「食」が充足されているか否かにあった。農村出身の学生は、ほぼ例外なく飢えていた。路遥『平凡な世界』の冒頭、1975年の高級中学で、主人公の孫少平は同じく貧しい農村出身者である郝紅梅と知り合い、言葉を交わすようになる。それは

二人が、値段によって三等級に区分される昼食のうち、一番安い高粱のマントウ（黒面膜）を、人目を避け、いつも最後に来て食べていたことがきっかけであった。ちなみに一番、上等な昼食は小麦のマントウ（白面膜）、二番目がトウモロコシのマントウ（黄面膜）で、それぞれの色に準えて、ヨーロッパ（白）、アジア（黄）、アフリカ（黒）と呼ばれていた（路遥 2000: 3-7）。

それでは農村出身の生徒は、都市出身者のクラス・メートに嫉妬したり、憎しみを覚えたりしたのだろうか。どうも、そうではないようだ。

『困難』の「私」は、「彼ら」の生活がいかに幸運に恵まれていることが、ただ羨ましかっただけ、と述べられている。そして自分だけが貧乏たらしい農民仕様のオンボロ服を着ていることを恥じたのだという。

決して彼らに嫉妬したわけではなかった。私はただ自分の貧乏たらしさが辛かっただけである（路遥 2009: 59）。

このように、县城戸籍の級友たちに対する「私」の感情は、羨望ないしはその裏返し
の羞恥であって、嫉妬や義憤などではなかった。同じ教室で机を並べていても、元々の境遇からして異なっている、引き比べても仕方がない、という感覚が農村の生徒には染み込んでいたようでもある。

そんななか、飢えに苦しむ「私」を気に掛け、ことあるごとに援助しようとしたのが、
県武装部部長の娘、クラス・メートの呉亜玲であった。彼女は「私」のプライドを傷つけないように配慮しつつ、あの手この手で「私」に食料を届けようとする。「私」はそれを振り切ろうとしつつも、自分に対する呉亜玲の態度のなかに、自分自身とは全く異質なものを
感じ取る。

私はこの女子生徒のなかに、まったく見覚えのない、それでいて非常に驚くべき何かを見たように思った……それは、ある種の超俗的な精神とでもいうべきものだった。そして、この点こそが私に欠けているものだったのだ。私は意志の強い、人となりの厳格な人間ではあったかもしれないが、それは田舎者の狭隘さを伴うものだった。この夜、目の前の女子生徒はその精神上の輝きで私の欠点を照らし出した（路遥 2009: 131）。

農村出身の青年が高級中学で都市市民に出会うことで、都会人の「超俗的な精神」に出会うとともに、田舎者である自分の「狭隘さ」、端的にいうと「ケチ臭さ」に気づく点には興味深い。賈平凹は『私は農民』のなかで、初級中学を卒業して故郷に帰り、農民になってからの自分の変化について、客観的な目線、言い換えると学生であった頃からの

比較の目線を用いながら、次のように述べる。

私はこの一年で、急速に本当の百姓根性を身につけた。無口になり、全ての困難に耐え、食べるもの、着るものには文句を言わず。何も持たずに出かけ、帰りには薪やら豚に食べさせる草やらを持ち帰らずにはおられない。庭にはあらゆる物が並べてある：木の枝、根っ子、稲や豆、拾ってきた縄切れ、針金、草鞋、煉瓦や瓦のかけら。節約できるものは米一粒でも節約するのだ（賈平凹 2006: 57-58）。

賈によれば、農民はケチくさい上に、自己中心主義的である。

一銭の金、一本の薪が、一握の食糧が自身の生命にとって大事なとき、少しでも失ってしまったら、それは永久に戻ってこない。ガツガツ獲りに行かないと自分の物にならない。ちょっとしたもののために狼や虎の如く猛り狂う。人が取れば、自分の取り分は減る……食糧への執着は、我々の最も基本的な道徳である（賈平凹 2006: 59-60）。

総じて、賈平凹によれば、街の子供と田舎の子供に知能の差異はないが、町の子供が見せる聡明さ、気前の良さ、快活さはいろいろなものを広く見聞した結果で、他方で田舎の子供は貧しさから卑屈で萎縮しており、臆病で嫉妬深くなっているという⁶。人は貧しいほどあれこれ思うことが多くなり、敏感で意固地になり、金持ちを恨み、都市を恨む。これは父親の代から彼らが受け継いだ DNA であり、小さい頃から彼らに農民の品性を身につけさせるのである（賈平凹 2006: 21-22）。

賈の語り口にはいささか自虐的な諧謔精神も垣間見える。しかし、こうした農民としての自画像が、学校の教室という場所で都市的な同級生と接触するなかで、都市民のネタとして解像度を上げてきたことは間違いないであろう。

3. 就職——限られた「枠」を競う

青年にとって就職が重要な人生の岐路であることはいうまでもない。青年たち本人に取りこぼりのポイントであればこそ、その成否をめぐるさまざまな苦悩や葛藤、喜びや絶望などの諸々の感情が渦巻く余地が生ずる。集団化時期の中国において、農村

⁶ この点に関しては、社会学者の費孝通が名著『郷土中国』（1948年）の中でほぼ同様の主張を行なっている。すなわち、農民が文字を知らないのは、彼らが愚かであるためではなく、農村の生活世界の範囲で文字を必要としないからである。逆に生活世界で必要な知識であれば、農民はそれらを豊富に持っている（費孝通 1999: 321-327=2019: 47-56）。

青年の就職をめぐる文化心理は、交叉地帯と、そしてその向こう側にある都市正規部門に連続していた。ビジネスで成功するなどの道がまだ存在していなかったこの時期、いつの日にか「商品食糧を食べる世界」に入ることは、多くの農村青年にとり、人生の夢＝目標といっても大袈裟ではなかった。

路遥の『人生』では、主人公の高加林が高級中学を卒業し、大学受験に失敗して帰郷する。高級中学への進学は、それ自身が大学進学への希望とワン・セットとなっているから、大学に進めないことは、いささかの絶望を伴う。これは、地域の文化心理というテーマにも深く関わり、同時代を生きた本人らにとっては、それなりに重いものであったろう。加林はいったん人民公社の学校の民弁教師となるも、生産大隊書記の息子にポストを奪われ、辞めさせられてしまう。県城の高校に通った経験のある加林のような青年にとり、なんとかして農村を抜け出し、都市の正式の職業に就くのは、素直に憧れの対象であった。

彼は今、高家村を離れ、どこかよその土地で労働者になるか、あるいはどこかの機関の職員になりたいという思いが強烈に湧いていた（路遥 2006: 79=2009: 291-292）。

そんなとき、兵役で長いこと新疆にいた叔父の高玉智が、地元の地区（実際には延安地区がモデルとなっていると思われる）労働局局長のポストにつき（落叶归根）、村に帰省する。前任の局長は裏口からの労働者や職員採用をやりすぎて民衆の大変な怒りを買って、解任されていた。叔父は軍を除隊したばかりで、それにずっと政治工作を担当してもいたため、党組織は叔父を信頼してこの任につけたのである（路遥 2006: 98=2009: 322-323）。そんな折、共産党県委員会の通信組でちょうど通信幹事に一人欠員が出たという情報が入り、ここで叔父の部下が上司に気を使い、裏で手を回して甥の高加林を通信幹事につける。晴れて都市正規部門の記者として県城で働くようになった高加林の喜びは、大変なものであった。

高加林が今狂うがごとく喜ぶのは、今度県城にやってきた自分が匆々たる過客としてではなく、すでに自分が県城の一員になったことを認識するからだった（路遥 2006: 98=2009: 332）

ここでは、都市正規部門の職に伴う権威が、県城という歴史文化的なトポスによって増幅されているのがわかる。これは、加林が県城の高級中学を卒業して農村に帰ったとき、「その後二人（県城の戸籍がある同級生の呉亜玲と加林—引用者）はそれぞれ別の地に住んだ。その距離は五キロ程でしかなかったのだが、実際には別々の世界に住むに等しかった（路遥 2009: 349）」と述べられていたことの裏返しである。

(1) コネクションの問題

『人生』に描かれたのはあからさまな裏口採用だが、集団化時期において、農村非正規部門から交叉地帯を経由して都市正規部門に人材が移動するケースは、実際にも数多く見つけることができる。それらは決して例外事例などではない。なぜなら交叉地帯は都市＝農村二元構造が成立するために必要な補完物だからである。

いっぽうで、従軍・幹部・臨時工・工農兵大学など、農民が農村外の交叉地帯に向かうための入り口は、常に限られた「枠」＝定員とともに募集がかかるものだった。募集は、農村集団部門からの人材を必要とする都市正規部門の側が必要な人数を提示し、政府が、農村集団組織に向けて募集をかけるかたちで行われた。前稿（田原 2022）で論じたように、交叉地帯への枠の募集は正式のルートを通して、基層の人民公社、生産大隊にまで降りてくる。『人生』でも、「近頃、地区の方から県の小炭鉱に増員枠を割り当て（路遥 2006: 99=2009: 324）」た、などの記述があるように、人員の募集をかけるのは県レベルのみならず、地区や、さらには省レベル単位の場合もあり得たであろう。

末端レベルの農村集団部門で誰にこの枠・定数を割り当てるかは、農村集団部門の「ゲート・キーパー」である幹部、とりわけコミュニティの人材を各々の人柄まで含め総合的に熟知している基層幹部がその権限を握っていた。そうした状況下で、定員を割り当てる権限を持つ基層幹部とのコネクションの問題も強く意識されてくるようになる。

賈平凹は 1967 年、14 歳で初級中学を卒業したものの、実家の農村に戻ることになる。ヒラの農民となってしまった賈平凹の場合、再び農村を抜け出すには、なんとかまず交叉地帯に潜り込む必要があるが、賈は何度も挫折を経験する。例えばあるとき、賈の住む大隊で、鉱山労働者の募集がかかった。生産大隊の 3 人の幹部が 十数人のリストから第一次選考を行った際、賈平凹は篩い落とされてしまった。理由は、彼ら 3 人が賈平凹のことをよく知らない、というものだった。また別のとき、民兵営長をやっている賈の従兄がやってきて、酔っ払っていたが、小学校の女性教師が産休をとるので代理教師が要る、大隊の指導部が彼に相談してきたので、賈を推薦しておいたという。しかし、この度も落選した。代理教師も多くの候補者が一つのポストを争っており、一人の幹部が身内の女性を入れると聞いて聞かなかったという（賈平凹 2006: 95-96）。

このように、農村集団部門の住民の側からみれば、限られた枠の争奪は、遠くにいる知らない相手ではなく、同じ集団部門に所属する身近な他者との間での競争となる。交叉地帯への入り口、あるいは交叉地帯から都市の正規部門への移動については、広く一般社会に募集がかかるのではなく、定数を徐々に分割しながら下位の単位に降ろしてくるため、最末端では身近な他人との間で競争が起きる。そのため、就職を求める青年たちの意識はコミュニティに対し「内向き」になるのである。

(2) 身近な他人との格差

賈平凹の農民時代は、確かに「苦しい」ものであった。だが、その苦しさは絶対的なものというより、苦しみをどこからみるかによって、あまり感じられなくなったり、切実な焦りを伴ったりと、ある種、相対的なものであった。

過去の苦難について今思い返すと、全く悲惨で、どうやって生きてこられたのかと驚く。しかしあの当時、苦しくてやり切れないとまでは感じていなかった。年中、山のなかに暮らしていて、比較するものもなく、村の人々はみんな同じだったからだ。当時私が悩み苦しんでいたのは、なぜ自分は背が低く、力が無く、まともな労働点数を稼げないのかということだった。さほど歳の違わない同年代の一部の若者は軍に入り、工場に入った者もいる。道路には乗用車も走っていたが、私は車に乗っている人に嫉妬したりはしなかった……ただし兵役から戻ったり、工場から戻ったりした者が自転車を持っていたりすると心がざわつき、そのことを考えるだけで焦りが込み上げたものだ（賈平凹 2006: 91-92）。

ここでは、自転車が当時でいう「成功者」のステータス・シンボルとして記憶に留められている。ある時、賈が村の道を歩いていたときのこと。隣村に住む元同級生が、颯爽と自転車に乗る姿を目撃する。彼は町で労働者となっており、そのお陰で婚約を成功させ、今はいくつもの土産物をぶら下げて、将来の岳父の家に向かうところであった。賈はすぐに顔を背け、道からそれて、相手に見つからぬよう草むらに身を隠して、しかし自転車が通り過ぎるのをじっと見ていた。ところがその様子を、ヨモギを採りに来ている村の女性に目撃される。彼女は賈を「ヘイ！ 彼のことを見てみなよ、アンタなんかとは比べものになんないね！」と揶揄する。彼をからかった女性に対し激しい怒りを覚えるとともに、この事件は賈に、町に近づくことのできた他人への劣等感を芽生えさせるきっかけとなった（賈平凹 2006: 93-94）。

この出来事から 10 年後、すなわち 1970 年代のことになるが、すでに作家となっていた賈が実家に帰省していた際、かつて自分を侮辱したこの女性の噂を聞いた。彼女は当時の夫と死別した後、再婚したが、新しい夫の息子を虐待しているという。息子が山で柴を刈って戻って来ると、お前が刈って来る量は隣の誰それより少ない、などと毎度、文句をつける。するとあるとき、この息子は家の前の道路を自転車で走る女性幹部を指差しながら、「自転車に乗れる人もいるのに、なぜあなたは乗らないんですか？」と義母にやり返した（賈平凹 2006: 94）。

以上から分かること。それは文化心理現象の発生における、準拠集団 (reference group) の重要性である。遠く離れた都市の人間が自動車に乗っているのを見ても何も思わない。異なる準拠集団に属するからである。ところが、同じ農民なのに「兵役から戻ったり、

工場から戻ったりした者が自転車を持っていたりすると心がざわつく」⁷ くのである。すなわち引き比べの準拠が適用可能な、身近な他人、つまり「我々農民」カテゴリーの誰かが都市と農村の交叉地帯である軍隊や工場に首尾よく入り込んだのをみると、初めてこれら他人と自分との格差が痛切に感じられ、苦悩や劣等感が生まれる。賈が草むらに身を隠しながらも、自転車に乗る元同級生をじっと伺っていたのは、同年代の若者の間に、ヒリヒリするような引き比べの心理があったからである。さらにそこでは、自転車が都市性=「洋」を象徴するアイコンとして、象徴的な働きをしていた⁷。

(3) 宙ぶらりんのアイデンティティ

もしも「完全な農民」が存在すると仮定すれば、これらの人々には都市と農村の間に生きることの文化心理的葛藤を覚えることはないだろう。それは、自分は農民である、農民でしかありえない、という安定したアイデンティティゆえである。ところが「交叉地帯」に生きる青年たちは、都市と農村の間の移動・環流の可能性があるだけに、そこまでに安定したアイデンティティはもちえない。農民戸籍のままで、都市労働部門で雇用される臨時工・契約工もそのような存在である⁸。

閻連科の自伝的ノンフィクション小説『父を思う』（《我与父辈》）は、自身の叔父の姿を通じ、臨時工の文化心理を巧みに描いている。閻は河南省嵩県の出身で、高級中学を中退したのち叔父が臨時工として勤めていた河南省新郷市のセメント工場で二年間、一

⁷ このように、各種の耐久消費財は時代時代において、都市からやってくる「洋」文化を象徴し、農民の都市への憧憬を刺激するアイテムとなりうる。かつて、自転車は奢侈品であり、政府の幹部など限られた人々にしか手の届かないもので、それゆえ自転車に乗ること自体が「大衆路線に反する」行為とみなされた。湖北省紅安県のある報告によれば、1956年冬以降、県級機関では「四多」（四つの多いこと）「三愿三不愿」（三つの気乗りすることと、三つの気乗りしないこと）との言い方があった。「四多」とはつまり、「自転車に乗ることが多く、バスケットをすることが多く、オーバー・コートを着ることが多く、食堂で食べることが多い」を指す。当時、自転車で移動することが、大衆から遊離した官僚主義的な行為として批判の対象となっていたことが分かる。また同じ報告では、県級機関の指導幹部のなかには農村に行きたがらない者がおり、あるいは「無理矢理」行かされても「身は田舎にあっても、心は町にある」という。税務局の局長張福は農村に行き三日しかたないうちに、郷幹部に向かって「街へ帰って髪を切ってくる」と言い出した。郷幹部が「床屋を探してあげましょう」というと「町に帰って風呂に入ってくる」という。郷幹部が「私が風呂桶を探してあげましょう」というと、「町に帰って服を着替える」と言い、自転車に乗って帰ってしまった（「中共湖北省委関與各級幹部種試験田的報告（1957年11月29日）」中共中央文献研究室1995:176-177）。ここではあたかも、自転車が農村から逃げ出すためのアイテムとして説明されているのが印象的である。改革開放開始時の1978年、中国農村での自転車の普及率は3世帯に1世帯程度であった。その後も自転車の人気は上昇し続け、1995年にピークを迎え、1世帯に1.5台ほどの水準となる。その後、農村の人々の憧れの対象はバイクに移るが、それも2007年頃にピークとなる。現在は自動車の時代を迎えつつある（田原2019b:25）。

⁸ 具体的な県域において臨時工がどのような生き方をしていたのか、地元農村とのような関係を持っていたかについて、田原（2022）では甘肅省西和県の麦村から隣県で「林場」の契約工となった人々を事例にしつつ考察した。

緒に働いた。叔父は当時、工場の材料運搬部門の班長だった。工場には叔父と同様に農村出身の臨時工として長く働いている熟練工たちがいた。

当時、臨時工は「はぐれ者」(一头沉)と呼ばれていた。彼らは農村の実家に戻れば「よそで働く人」とみなされた。冒頭に引用した通り、閻にとり、叔父は田舎に都会の風を運んでくれる存在だった。しかし、その「よそ」、つまり都市や都市近郊へやってくると、彼らは都会の人や同じ工場の労働者から「農村の人」とよばれることになった。「はぐれ者」は工場や都市では軽蔑を受けたという。なぜなら、都会に出るために身分を捨てようとして、捨てきれておらず、都会で幸福を手に入れようとして、それを果たしていないからだという。

ここで誰もが思い出すのは、二項対立による物語の展開を得意とするイソップの童話、鳥でも獣でもない、「卑怯な蝙蝠」の物語だろう。臨時工は蝙蝠に似て、都市民でも農民でもないどっちつかずの身分なので、工場では小銭を稼ぐために汚い仕事、疲れる仕事を進んで引き受けるといふ。それで、小利に目がくらんでメンツを捨てていることを嘲笑される。

さらに農繁期になると、ほかの正規労働者のように時間を守って出退勤を続けるのがつらくなる。田舎にいる妻子や年老いた両親のことが、いつも気にかかる。麦の刈り取り、畑の鋤き起こし、種まきが心配でなくなる、と閻は説明する。

彼らの最大の特徴は、工作中ずっとびくびくしていることだ。仕事をしくじって、飯の種を失うことを恐れている……「はぐれ者」たちは退勤後、自然に集まって酒を飲み、田舎では味わえない生活の喜びを堪能するのだ。叔父はこうして酒好きになった(閻連科 2009: 148-149=2016: 188-189)

路遥の『平凡な世界』でも、主人公の孫少平が正規労働者として働くようになった炭鉱(陝西省銅川炭鉱がモデルと思われる)で、周囲の農村からやってきた臨時工(協工)の様子が描かれている。農村出身の鉱夫らの行動は、閻連科の叔父とは様相を異にしていた。彼らの態度はむしろ大胆不敵で、麦刈りの時期になると勝手に実家に帰ってしまい、石炭の採掘量に大きく影響するため、炭鉱側は頭を抱えていた。孫少平はまず、農村出身者らのボス格3人を招待してポケット・マネーで酒宴を張り、彼らの本音を聞き出そうとする。ボス格らによれば、臨時工の実家の多くは、実際には十分に麦刈りの人手は足りており、多くの者は麦刈りを口実に実家に帰り、ゆっくり休んだり、妻の身体に触ったりしたいだけだという。孫少平はこれを聞いて、奨励金・罰金制度を考案する。麦刈りのシーズンに一定の日数を超えて出勤したものには奨励金、逆に同シーズンに最低限の出勤数を下回ったものには罰金が課されるというものだ。この措置により、農村の実家に帰る臨時工は激減し、炭鉱全体が政府による表彰の対象にさえなった(路

遥 2000: 1262–1270)。

両者の臨時工の描き方の違いは、地域や業種の違いもあろうが、その目線が内在的か、あるいはやや外在的かという視点の違いにもよるだろう。閻連科が完全に叔父に寄り添った目線で、常に「ビクビク」した臨時工の心理を描いているのにたいし、路遥は、農村出身者であるとはいえ、すでに炭鉱の正規労働者であり、臨時工を監督する立場にある主人公の孫少平の目線から、農民臨時工たちの行動を大胆不敵な、したがってそれを管理し御すべき対象として位置付けているのである。

臨時工は、守備よく都市の正規部門に潜り込む事例もあれば、退職後は農村に戻らざるを得ない場合もある。彼らの人生の経歴は、純粹な農民からすれば特殊なものである。閻連科は作家となったのちに帰省した際、長く臨時工を務めた後、実家で余生を過ごす叔父と再会する。今の生活に話が及ぶと、叔父はぎこちない笑みを浮かべて小声で言った。

よそで長く暮らした後、田舎に戻ってみると、慣れないことばかりだ……とにかく、だれとも話が合わない (閻連科 2009: 162=2016: 205)。

閻は続けて述べる。

叔父は一生、さすらいの人だった。都市においては田舎者で、農村に根があるために都会になじめなかった。一方、田舎においては都会の人だった。農村を離れて長いので体の血液が都会化し、田舎の人に戻ることは難しい。天にも地にも届かない宙ぶらりんの生活が実についてしまった (閻連科 2009: 162=2016: 205)。

この「宙ぶらりん」の感じも、都市正規部門に入れず、最終的には農村に帰還した人々に特有の文化心理であろう。純粹に農村に生きてきた人々とは微妙に異なる感覚を、在外経験者は持っている。例えば現在、どの村にも一定数の退役軍人がいる。彼らの多くも、隣人には容易に理解されえぬ思いを秘めつつ、従軍中の思い出を胸に秘めながら農村で日々を過ごしているのではないだろうか。

4. 恋愛と結婚——交差地帯の超越

都市と農村の交叉地帯の問題を最も鮮やかに映し出すのが、当時の青年たちの恋愛・結婚問題であつたろう。例えば『人生』の主人公、高加林は同郷の農村出身者、非識字者であるが美貌の娘、巧珍と、县城の高級中学で学んだ際の同級生である南方の江蘇省出身の幹部の娘、亜萍との間で揺れ動く。当時の恋愛は、単なる個人的好みの問題とい

うよりは、都市の正規部門と農村の非正規部門という変数が大きく絡むので、ややこしい。加林が農村に帰ってしまってから、亜萍は元同級生で県城の幹部子弟、克南との恋愛を始めていた。ところが前述の通り加林が正規部門の記者として県城に返り咲いてから、加林、亜萍、克南は三角関係に陥り、最終的に、加林は克南から亜萍を奪ってしまう結果となる。このことを逆恨みした克南の母親（冒頭に紹介した肥汲みのエピソードで加林を侮辱した）が、加林の裏口就職を告発した結果、加林は記者の職と都市戸籍を剥奪され、農村に追い返される羽目になる。

(1) 社会学的想定

同じように農村を観察し、解釈していても、社会学と文学には大きな違いがある。社会学は、対象をあくまで相対的に見て、有意味な結論を導こうとする学問である。相対的に見るということは、突出したヒーロー、ヒロインの魅力を描くのではなく、「大多数の人々はどうするか？」と考える、ということである⁹。例えば中国社会で結婚を問題にしようとするれば、特殊な結婚ではなく、一般的な現象を見なければならぬ。そこで大多数の人々が従うのは、個人の感情というより家同士の実力が釣り合う（門当戸対）かどうかという大原則で、この大原則に従わないケースはごく少数となる。かつての日本では、家の実力というより「家格」が重視されたが、家同士のバランスを重視するという意味では基本的には似通っている。

いっぽうで、こうした釣り合いの取れた恋愛や結婚は、文学の題材としては面白くも何ともない、ということになる。だからこそ、社会的亀裂を跨いだ恋愛や結婚が文学の題材としては好まれる。

とはいえ、社会的亀裂を跨ぐ恋愛や結婚であっても、社会的・経済的に優勢な家族の一員である男性が、家格的・階層的には下位であるが、容姿の優れた女性を求め、女性の側も社会経済的に優勢な男性に媚を売る、というパターンは、むしろ社会学的には合理的に説明の付く組み合わせである。この場合、女性からすれば自らの容姿という資源を、男性の持つ社会経済的な資源と交換したことになるからだ¹⁰。

⁹ 社会学は物事を相対的に見るため、意識的に「比較」の方法を用いることで、そこから有意味な結論を引き出そうとする。比較の手法は、自然科学における実験を代替するものである（鶴見1999）。

¹⁰ 日本の場合、身分制度によって婚姻自体が自由でなかった江戸期から、明治期に入ると美人が玉の輿に乗って上の階層に移動する現象が大量に発生した。これに対し、そのことが旧来の家格や社会の「けじめ」を乱すものであるとする「美人罪惡論」が流行した（井上1991: 85-90）。中国の場合、社会主義的体制が固まり始めた1950年代がそのような時期であったろう。久保（1978: 345-354）は、1950年代の『中国青年』や『中国婦女』などの記事から、「一に労働者、二に幹部、三に軍人、死んでも百姓の嫁にはならない」という歌が流行した同時代の変化を紹介している。すでに農村の青年と恋愛している娘たちが、労働者と知り合うや否や元からの相手を捨ててしまう状況が始まっていた。

文学作品中にも、こうしたセオリー通りの話も多く描かれている。路遥作品でいえば、田舎娘であっても器量が良い『人生』の巧珍のような女性は、しばしば県城や公社の「正式の仕事」についての男たちの求愛を受ける対象になる。

農村の娘、巧珍の美貌からすれば、あるいは相手に公社の職員や農村出身の正規の労働者を見つけることも簡単なことだった（路遥 2009: 208）。

美人の農村女性と、正規の職に就いた男性との組み合わせは、当時の県域社会にはかなり多く見られたのではないかと思う。1998年以前の戸籍制度では、子は母親の戸籍を受け継ぐことになっていた¹¹。つまり都市戸籍の父と農村戸籍の母の間に生まれた子供は、農村戸籍になってしまう。おそらく、この制度的措置は、農村の美人を狙った正規部門の男性が徒に都市戸籍の保有者を増やさないようにする点に狙いがあったろう¹²。

さはありながら、村に留まっている純粹で非識字の農村女性である巧珍にとっては、当時でいう高学歴者として高級中学に学び、いったんは都市（県城）の世界に身を置いた同じ村の加林こそが、憧れの対象だった。このような青年は、交叉地帯の諸領域でいえば、帰郷青年（回乡青年）に分類される。

加林が高校を卒業し、大学受験に失敗して悄然と村に帰ってきた時、巧珍はほとんど狂わんばかりに喜んだ。……もし、彼が農村戸籍の娘を求めるしかないとすれば、文字を知らない彼女にも自分を愛させる自信があった（路遥 2009: 211）。

ただ、社会学的な現実により即していうと、このような帰郷青年よりも都市戸籍を獲得した「国家の飯を食う」青年の方が、恋愛・結婚市場においては有利である。賈平凹は故郷の人民公社でヒラの公社員を経験した後、実家付近のダム工事現場でローカル新聞の記者としてダム建設の模様を記事で伝える仕事に配属された。ヒラの農民からは少し、昇格したのである。そんな時、公社に外部の労働者の募集が掛かり、多くの青年がダム工事の現場を離れていった¹³。「労働者」になるということは、これらの人々は正規部門に入って「国家の飯を食う」ことになった、ということだ。すると彼らは短期間のうちに縁談をまとめ、嬉々として「嬉糖」（婚礼の際に配る祝いの飴）を配ったという（賈

¹¹ 《中国戸籍制度改革历史回眸》中央政府门户网站（www.gov.cn）、2022年10月27日閲覧。

¹² こうして出生した母親が農村戸籍、父が幹部など正式な仕事に就く人員である青年男性らが、自身の運命を変えるために、炭鉱などの「交叉地帯」に潜り込んでいったと思われる。これについての具体例は、『平凡な世界』（路遥 2000: 956）に描かれている。

¹³ このダム建設現場の青年たちは、実質的にインフラ建設のための中核的労働組織「基建隊」と呼ばれた組織を編成していたと考えて差し支えない。外部から人員抜擢の募集がかかると、基建隊から優先的に推薦されて出ていく、という筆者の知見（田原 2022: 101–103）にも一致している。

平凹 2006: 168)。それを見て、賈は思う。

理解できないのは、「国家の茶碗」（中国語では「鉄飯碗」、つまり割れない茶碗であり、食いつぶぐれの無い政府系の正規の職業を指す——引用者）を一旦手にしたら、結婚がここまでたやすくなることだ。これらの娘たちは、どこかに備蓄されていて、誰かが労働者や幹部になると、一人ずつ卸売される仕組みになっているんじゃないだろうか？（賈平凹 2006: 168-169）

この現象は、賈のさらに興味深い連想を導く。

山で草や芝を刈るときに経験があるのではないだろうか。高い山、広い野原で蠅一匹いないように見えても、一旦糞をしたら蠅が集り始める（賈平凹 2006: 169）

さらにここには、「今回の募集に採用されたのは全て大隊幹部の子女か親戚だった（賈平凹 2006: 169）」というオチもついている。

そのような意味で、当時の農村においてとりわけモテたのは軍人である。賈平凹はいう。

1960年代、軍人の地位は非常に高かった。従軍しさえすれば、家がどんなに貧乏でも、外見がどんなに悪くても、初婚の相手と婚約するのは容易かった。兵役に応募するには、公社の武装幹事との関係をつけなければならなかった（賈平凹 2006: 94）。

ここでも、「関係」の必要性が示唆されていることに注目したい。

毛沢東時代の都市と農村の交流という点、多くの人々が、大都市から農村に下放した知識青年を思い浮かべる。確かに、大都市の知識青年男性が農村女性、しかもいささかの教養のある農村女性にモテたことは事実らしい。知識青年の男性が農村女性の憧れの対象となった点について、1980年前後が舞台となっている路遥の『姉』は次のように描写している。

姉は高校を卒業してもう何年にもなる。何度か続けて大学を受験したが毎回ほんの数点足らなくてその都度受からなかった……ここ何年か姉に結婚話は幾らでもあった。相手は大部分が県城やその他の町の職員や労働者だったが、姉はことごとく拒んでいた……姉の愛した人は省都からこの生産隊に住み着き、最後にこの村を離れた知識青年（路遥 2009: 6-7）。

「姉」は下放知識青年をめぐる、いささかロマンチックな物語に仕立てられている¹⁴。が、同じ現象を逆に地元の農村青年の視点から見ると、どうだろうか。そこにはいささか異なった映像が立ち上がる。帰郷青年だった賈平凹は当時を振り返り、以下のように述べている。

当時、私は都市からきた知識青年らをどれほど羨んだことか……彼らは往々にして、村では重要で、かつ楽な仕事に就いていた。裸足の医者、代理教師、トラクター運転手、労働点数記録係、文芸宣伝隊員など。彼らは定額の、中の上ほどの食糧の割り当てがあり、定期的に街に帰ることができ、ラジオや本、懐中電灯、万金油、ビスケットや飴などを持ち帰った。彼らは洋風ズボンを履き、首にはマスクをぶら下げ、ナイロン製の靴下やカンバス地のベルトを持っていた。物知りで弁舌爽やか、そのくせ人の鶏や犬を盗み、数人で私たちのうちの一人をとり囲んでぶん殴るのもお手のものだった（賈平凹 2006: 26）。

帰郷青年と下放知識青年は、都市の戸籍を持たずに（失って）農村に滞在中であること、就職や結婚を控えた将来のある青年たちであるという意味で、互いに近い立場にある。彼らは農村青年にとって、遠くにいる「街の人」ではない。賈は続けていう。

もっとやるせないのは、彼らが村のなかで一番美人な娘たちを惹きつけたことで、娘たちはまず彼らを選んだ後で、選べずに余った娘がようやく我々に回ってくるという塩梅だった。数年前、世間では「小芳」という曲が流行したが、そこで露呈しているのは、知識青年が町に戻る際に打ち捨ててきてしまった村の少女に対する、歳月を経た後の懺悔と追憶の念だ。そこで歌われた「ありがとう、君が僕にくれた愛、あの時代と一緒に過ごしてくれた」という歌詞を聞くと、私はその優男らの軽薄さに反吐が出る思いがする。彼らは時代の災難にあったのかもしれないが、農村にやってきて我々の食糧、野菜や鶏を食い、我々から愛情を奪い、元から荒れ果てていた農村をより一層、荒涼とさせてくれたのだ（賈平凹 2006: 26）。

下放青年が農村青年から「愛を奪う」という言い方は印象的である。交差地帯を経由して、富や人材が農村から流出する、というのはある意味、わかりやすい。だが、愛情が強奪されるのが事実だったとすれば、それは農村にとり最も深刻な事態だったろう。もっとも、これに関しては、都市の女性が下放先で農民に嫁ぐ事例の方が多かったかも

¹⁴ 同様のモチーフは、多数見受けられる。例えば張芸謀監督映画作品「初恋のきた道」（原作小説は鮑十の『私の両親』（《我的父亲母亲》）は1950年代が舞台だが、都市からやってきた青年小学校教師への農村の少女の素直な憧れが描かれている。

しれず、拙速な判断はできない。

(2) 亀裂を飛び越える

恋愛や結婚の興味深いところは、場合によって社会的亀裂をこえる可能性を秘めている点である。別の側面からいえば、社会的亀裂をこえる恋愛だからこそ、ドラマが盛り上がる。もっとも、農村に軸足を置いた美人と、都市に軸足を置いた青年との恋愛話も社会的には「想定内」のドラマではあるが。

男女の間の社会的亀裂を恋愛の力で埋めようとする時、生活習慣の面から相手方の文化に同化しようとする行動が起こる。例えば農村の人間の目から見て、都市文化のアイコンのような事物をつかむことで、相手に近づこうとする場合がある。かつての中国農村で、自転車と同様に、「歯磨き」や「入浴」も都市的なアイコンの例である。

路遥『人生』にも、農民の歯磨きに対する違和感について詳しく触れた箇所がある。農民の娘である巧珍は、县城の高級中学に通う主人公の加林と、おそらくはその背後にある都市的文化への憧れもあって歯磨きを始めた。家の前で、歯を磨く巧珍の周りには、村人が集まってきて物珍しそうに見物始める。慣れない行為で、口中を血だらけにしつつ磨き続ける巧珍を見て、「早く医者を呼んだ方がええんじゃないか？」と叫んで人々の爆笑を誘う老人も出た。

そのうち父親が戻ってきて、「この恥知らずがっ！ さっさと家の中に戻れ。わざわざ外に出てきて親父に恥をかかせるつもりか」と怒鳴りつける。巧珍は、县城の高級中学生である妹の巧玲が農村の実家に戻った際に歯磨きをしているのを引き合いに出し、なぜ、自分の歯磨きだけがダメなのかを問いたです。

「じゃ、巧玲がハミガキをするのをなんで放っておくのよ！」

「巧玲は巧玲、お前はお前じゃ！ あれは学生で、お前は百姓だ！」（路遥 2006: 42=2009: 230）

ここから分かることが、いくつかある。第一に、歯磨きをめぐり、世代間の態度の違いである。若い世代の農民である巧珍は、学校にも行けていない非識字者であるにも関わらず、都市への憧れを持ち、都市的な農村出身者である加林の影響を受けた結果、歯磨きを始めている。これに対し、父の方は歯磨きという行為を、ハナから受け入れる姿勢を見せていない。これは一面では、都市的な世界をめぐり「憧れ」には、大きな世代間ギャップが存在することの現れとみなしてもよい。

第二に、「彼ら」と「わしら」、すなわち都市住民と農民をはっきり区別して考える発想が、父の言葉に現れている点である。つまり、歯磨きは「彼ら」の習慣であって、「わしら」が真似をするようなものではない、ということである。「彼ら」を批判的に、シニ

カルに見るであるとか、敵視するわけでもない。ただ、自分達とは異なる人間なのだという点が父の言葉に表れている。歯磨きというのは都市の知識人や幹部がやる分には構わないが、農民がそれを真似するのは非常に奇妙なことだ、という思いがある¹⁵。

第三に、「恥知らず」という言い方に現れている通り、父の意識のなかには、「わしら」の内部を構成する他のメンバーの目が強く意識されている。父において、その行動選択は、「わしら」すなわち同じ村の村民の基準に照らして受け入れられるかどうかが重要である。

第四に、同じ家に生まれ育った姉妹であっても、巧玲のように県城の高級中学に通っていれば「街の人」と見做される点も重要である。農村出身の高級中学生は完全な都市市民ではなく、路遥自身の用語によれば「交叉地帯」の住人である。しかし、都市性と農村性すなわち「洋」と「土」というのは程度の問題であり、都市に住んでいる県城の学生にとっては都市性を感じさせる歯磨きが似合う（上田 1991: 96-81）。これに対して、実家に住む農民の娘が同じことをすると、奇妙でチグハグな印象が生まれる。

このように、世代間のみならず、同じ世代の兄弟の間で教育の格差が存在し、したがって都市性の度合いが異なっていることは、普通のことであった。兄弟姉妹間で序列が上であれば、家族内の労働力の必要性からも進学機会を望めないケースが多くなる。いっぽう、年下の兄弟姉妹になるほど、年上の兄弟の労働によって家庭内にも蓄積ができてきて、進学機会も得られやすくなる。『平凡な世界』の主人公家族の兄弟姉妹の間でも、長女の蘭香が非識字者、長男の少安が小学校卒業、次男の孫少平が高級中学卒、次女で末妹の蘭花が大学進学と、序列によって明確に学歴の差が出ている。小説ではあるが、否、小説であればこそ、これがリアリティをもつ設定なのである。

ともあれ、自転車や歯磨きなど、どのような事物や行為が「都市的な」イメージを運ぶのかは、優れて社会的・時代的のコンテクストに依存している。これらは農民の文化心理研究の興味深いテーマとなりうるだろう。

¹⁵ 歯磨きの習慣が生まれたのは、さほど古いことではない。日本の場合でも、近世には爪楊枝や房楊枝を使用した口腔内の清掃が成立、6月4日の「虫歯予防デー」が日本歯科医師会によって制定されたのは1928年のことだった。現在のように樹脂の柄にナイロンを植毛した歯ブラシに、合成洗剤を用いた練り歯磨きを塗って使うようになったのは、第二次大戦後になってからのことである（木村ほか 2016: 536）。中国でも、『人生』に描かれた1980年代から歯磨きは、「衛生」「健康」「文明」などのシンボルとして普及させられたが、2000年の段階で、5歳児の齲歯（虫歯）率が76.55%、全国で三分の一の人に良好な歯磨きの習慣がなく、特に農村ではまだ57%の人が歯を磨かないという調査結果が示されている（《农村有57%的人不刷牙》《农民日报》2000年5月30日）。そのため当時の歯磨き粉の潜在的市場は5億人と見込まれていた（《牙膏消费还有五亿人的空白》《农民日报》2000年7月20日）。21世紀の現在でも、歯磨きをしない中国農民はまだ多いであろう。

(3) 非社会学的想定

文学作品は、社会学的現実とは逆の、特殊な、それゆえ理想主義的な人物造形を行うことがしばしばある。路遥の『平凡な世界』という小説に特徴的なのは、(美人)「農村女性」→「都市男性」への憧れという、当時の社会学的に一般的な恋愛があまり描かれておらず、逆の方向性を持つ人物造形が多用されている点であろう。

小説の中心的な登場人物、双水村出身の兄弟である、孫少安と孫少平は、それぞれ田潤葉と田曉霞という、元を辿れば同村の出身だが、自身らよりはるかに都市的な背景を持つ(したがってはるかに「条件の良い」相手を見つけられるはずの)女性らによって愛される、そのような設定となっている。田潤葉は県城の学校教師ですでに都市の戸籍を持っているが、幼い頃、村で一緒に育った孫少安のことを慕い続ける。そのおかげで、都市市民である夫の李向前との結婚生活は長期にわたり、不幸なものとなる。田曉霞は潤葉の従妹で、県指導者田福軍の娘であるが、高級中学の同級生であり、のちに炭鉱の正規労働者となって、しかしきつい労働に耐える孫少平と連絡を保ち続ける。兄弟ともに、社会学的想定からははみ出す恋愛が描かれることで、登場人物の規格外の人格的魅力が浮き彫りにされる。それを通じてまた、1980年前後、時代の変わり目に位置する交差地帯の文化心理を炙り出している。

5. むすび

本稿では、文学作品を頼りに農民の文化心理の解釈を試みた。ささやかではあるが、中国農民をめぐる新たな知見として、以下の三点を提示しておきたい。

第一に、農村住民が都市市民や都市性に向ける眼差し、都市をめぐる主観的な体験、すなわち文化心理は、人的環流の歴史的展開によって規定されている。例えばロシアのように都市=農村間の活発な人的環流が長期に渡り続けば、最終的には「都市の人」と「農村の人」の区別は極めて小さなものになりうる(田原 2019a)。農村蔑視・都市崇拜の文化心理は、人的環流の規模が小さく、都市と農村が相対的に分断された二元構造から生まれる。

第二に、しかしながら、集団化時期の中国社会が、都市と農村の「完全に」分断された二元構造であったと仮定すれば、そこではむしろ両者の互いに対する互いの文化心理は立ち上がらず、互いのイメージも曖昧になるだろう。交叉地帯が存在し、不活発であっても人的環流が存在したからこそ、ヒトの移動に伴うモノやイメージの交流が生じ、本稿で見てきたような文化心理が立ち上がった。都市への移動が制限されたなかでの移動の可能性、「制限の中の可能性」こそが、希望や絶望、憧憬や嫉妬、さらにいえば愛情や憎しみのようなものまでを掻き立てる要素となっていた。

さらに関連して、交叉地帯を移動し、比較的、明瞭な文化心理を形成したのは、自ら

の将来の展望を空間的・社会的な移動と結びつけて考えざるを得ない青年たちであった。農民子弟の就学や就職、恋愛や結婚は交叉地帯の移動や超越と不可分であった。これは移動可能性のそもそも小さかった中高年層の農民とはニュアンスを異にする。

第三に、本稿で検討してきた文化心理の中心は、大まかに括るなら都市崇拜とその裏返しとしての農村蔑視のマインド・セットと呼べる。これは日本を含め後発の近代化を経験してきた各国農村の経験 (e.g. 柳田 2017) にも大まかに合致するものかもしれない。いっぽうで、ここには中国社会主義の制度的配置が折り重なることによって、独特の味付けがなされてもいた。その一つが、農民の「都市崇拜」に絡む準拠集団 (reference group) の問題である。教室の人間関係や歯磨きの例にも見られた通り、当時の農民の目から見て、都市市民は、自分達とは「全く異なる人々」との意識がすでにはっきりと存在していた。つまり、都市市民はそもそも農民の準拠集団ではあり得ず、都市に対しては「憧憬」の感情はあっても、相手と自分の準拠集団が同じであるときに感じる「嫉妬」の感情は強くない。ところが、賈平凹の自転車のエピソードなどに見られるように、同じ農民カテゴリーの間で、コネクションを用いたりして限られた「枠」を勝ち取り、都市性に近づくことに成功した者を見ると、非常に強い「妬み」が発生しうる。冒頭に触れた通り、別稿 (田原 2019b; Tahara 2022) ではこうした文化心理の帰結を、21 世紀現在の中国農民を特徴づける「他律的合理性」(heteronomous rationality) あるいは「公平さのダブル・スタンダード」と呼んでおいたが、本稿では実際にそうした心理が立ち上がる際の機微が、農村青年の主観を代弁した文学作品を通じて確認された。

この文章は、都市と農村のはざまを生きる個人個人の、取るに足りないようにも見える主観的レベルの感情の揺れ動きが共同的な文化心理を形成した際、一つの有意味な研究対象となりうることを示すための試論でもあった。

参考文献

<中国語>

費孝通 (1999) 《郷土中国》《費孝通文集 第五卷》北京：群言出版社 (=費孝通著・西澤治彦訳『郷土中国』風響社、2019 年)。

賈平凹 (2006) 《我是农民》北京：中国社会出版社。

路遥 (2000) 《平凡的世界 (上、中、下)》北京：中国青年出版社。

—— (2006) 《人生》北京：人民文学出版社 (=路遥著・安本実選訳『路遥作品集』中国書店、2009 年)。

閻连科 (2009) 《我与父辈》昆明：云南人民出版社 (=飯塚容訳『父を想う——ある中国作家の自省と回想』河出書房新社、2016 年)。

中共中央文献研究室（1995）《建国以来重要文献选编 第十一册》中央文献出版社。

<日本語>

井上章一（1991）『美人論』リポート。

上田信（1991）「郷と城のあいだ」野村浩一・高橋満・辻康吾編『もっと知りたい中国II 社会・文化篇』弘文堂。

木村茂光・安田常雄・白川部達夫・宮瀧交二編（2016）『日本生活史辞典』吉川弘文館。
久保真一（1978）「都市に対する意識構造：1950年代後半のできごと」小島麗逸編『中国の都市化と農村建設』龍溪書舎。

田原史起（2019a）「都市=農村間の人的環流：中露比較の試み」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第23号。

——（2019b）『草の根の中国：村落ガバナンスと資源循環』東京大学出版会。

——（2022）「都市=農村間の人的環流——集団化時期中国の『交叉地帯』をめぐって」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第26号。

鶴見和子（1999）『鶴見和子曼荼羅IX：環の巻』藤原書店。

安本実（1997）「路遥文学のキーワード・『交叉地帯』について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第10号。

柳田国男（2017）『都市と農村』岩波文庫。

路遥著・安本実選訳（2009）『路遥作品集』中国書店。

<英語>

Tahara, Fumiki (2022) “Heteronomous rationality and rural protests: Peasants’ perceived egalitarianism in post-taxation China,” *China Information*, OnlineFirst (<https://doi.org/10.1177/0920203X221108994>).

附記1

本稿が扱った時期からはややズレるが、現在により近い2000年代の県城の高級中学のクラスも、交叉地帯としての特徴を色濃く残していたようである。ここに、参考情報として在日中国人研究者である周さん（1987年生まれ）の個人的体験を記しておこう。

周さんは3～4歳まで湖南省の永州市で過ごした後、海軍軍人であった父の仕事の関係で、少年時代を海南島で過ごした。2003年、高級中学に入るために父の故郷である湖南省瀏陽県に単身で転居した。海南島の教育レベルが理想的とはいえない点を考慮し、人文的伝統の強い湖南で高級中学に就学することはメリットが大きかった。とくに瀏陽県は、清末の思想家譚嗣同や共産党指導者胡耀邦（1989年、その死をきっかけとして六

四天安門事件の発端となる学生運動が起こった)の出身地でもある。

学校の宿舎は10人部屋で、周さん以外の9人はすべて県内の農村出身の生徒だったという。入寮した日、農村からやってきたルーム・メイトが、農民工が持っているような巨大なビニール袋に荷物を入れていたことに驚いた。言葉を交わしたが、相手のいうことがさっぱり聞き取れなかった。そこで、相手が標準語に切り替えてくれ、ようやく話が通じた。全員が地元の方言でしゃべる中、標準語しかできなかった周さんは周囲から珍しがられ、海南島からやってきた生徒ということで、休み時間に他のクラスからも周さんを「見物」に訪れる者さえいた。最初は中々、馴染めなかった。

本文に見たとおり、1960年代初頭が舞台となった路遥の『困難』などの小説では県城の高級中学はほとんどが都市戸籍で、なかでも幹部子弟が多かったという設定となっているが、1975年を描いた『平凡な世界』では、少なからぬ級友が農村出身者の設定となっている。周さんが高校に入った2003～2006年前後の瀏陽県の高級中学では農村出身の生徒が全体の三分の二、県城出身者が三分の一ほどであった。

概して農村出身の学生の方が、勉強熱心であり成績が良かったという。農村出身者は、県城の高級中学に出てきたことを最大限、人生のステップにしようと思欲に燃えていた。教師に学習について何か注意でもされようものなら、涙をポロポロこぼして悔しがるほどであった。三分の一ほどを占める県城出身者は、県のエリートの子供であり、お互いに知り合いで、学校の教師などとも家族ぐるみの付き合いをしていた。

県城住民の子弟は、概してまじめに勉強しない。彼ら・彼女らは宿舎に入寮しても、あるいは自宅通学でも構わなかったが、彼らにとり寮に入ることは農民子弟と同列になるという意味で「ダサイ」ことであった。一部の保護者は、勉強熱心な農村の生徒の良い影響を期待して子弟を入寮させる場合もあった。

学生証には色で区別があり、毎日帰宅する自宅生は青色、宿舎生は赤色に塗られていた。赤い学生証の生徒は、実家に帰ることを含め、基本的に日曜日のみ、学校から出ることを許されていた。農村出身の生徒は月に一度ほど、実家に帰っていた。周さんは数度、ルーム・メイトの実家について行ってことがある。そうして農村を訪ねることで、地元の県にも馴染んで行ったという¹⁶。

附記2

本稿は、2021～2025年度KAKENHI「中国の『県城』をめぐる歴史社会学的研究：都市=農村関係と人的環流」(課題番号：21K12401、研究代表者：田原史起)による成果の一部である。

¹⁶ Zoomによる本人へのインタビュー、2020年7月4日。